

The title 'ZAIRAICHI' is presented in a grid of three rows and three columns. The characters are stylized and colorful. The first row contains 'Z' (orange), 'A' (gold), and 'I' (gold). The second row contains 'R' (gold with concentric circles in green and orange), 'A' (orange), and 'I' (green). The third row contains 'C' (green), 'H' (gold with orange and green horizontal bars), and 'I' (light blue). A vertical orange bar runs along the left edge of the page.

no. 1

ZAIRAI CHI 創刊号

アフリカにおける社会的な性差を基盤にした知識や技法を理解するためのあらたなアプローチ

Z

A

I

R

A

I

C

H

I

no. 1

ZAIRAICHI 創刊号

アフリカにおける社会的な性差を基盤にした知識や技法を理解するためのあらたなアプローチ

the 7th International Research Forum
of African Studies, Kyoto University
Role of African Area Studies for "African Crisis"
平成22年度京都大学全学総会による第7回国際共同研究
「アフリカ研究はアフリカの危機にどう対応するか」

26th March, 2011
admission free



The Center for African Area Studies, Kyoto University
46 Yoshida Shimoadachi, Sakyo, Kyoto 606-8501
TEL : 075-753-7803
E-MAIL : caas@jambo.africa.kyoto-u.ac.jp

Organizer : Center for African Area Studies, Kyoto University
Co-Organizer : African Local Knowledge(ZAIRAICHI) Research Group
In cooperation with Anthropological Institute, Nanzan University

photo by KANEKO Masae

第7回国際フォーラム・ポスター発表, ちらし(2011年3月26日開催)(金子 守恵 : 本書1-3頁)

牛をつなぎかえに来たAさん. 杖をもち, この後近隣を散歩する.(野口 真理子 : 本書5-13頁)





シロアリ塚の利用 [土壁材] (山科 千里 : 本書 15-23 頁)

アムハラの専従織師 (板垣 順平 : 本書 25-33 頁)





「健康のおかね」記帳の様子（神代 ちひろ：本書 35-44 頁）

木工品（ゴンガとガンダ）を利用した酒づくり（南 佳枝：本書 45-52 頁）



ZAIRAICH

ZAIRAICH 創刊号

アフリカにおける
社会的な性差を基盤にした
知識や技法を理解するための
あらたなアプローチ

金子守恵／重田真義 編

no. 1



ZAIRAICHI 刊行によせて



人びとの「知」はこれまでどのようにとらえられてきただろうか。固定的な参照物としての伝統知、それに対置される近代知、そして普遍的な真を代表する科学知、私たちはそれらのいずれもが、今ここに生きる人びとの実践的な知をあらわしきれないという思いをいだいてきた。

ZAIRAICHI/ 在来知 (Local knowledge) とは、人びとが自然・社会環境と日々関わるなかで形成される実践的、経験的な知である。このような「知」を実体としてとりだしてみせることはできない。しかし、私たちは、それぞれの局面でたちあられる知の存在様式に注目してその生成と実践の過程をみつかることができる。分析の主な対象は人びとの生活における行為とそれに関わるモノである。

ここでいう ZAIRAI/ 在来とは、モノ（生き物を含む）、ヒト、そしてそれらが生み出す行為、思想、知識、生業、環境、制度、慣習、コミュニティ等、あらゆる研究対象について、ある「地域」における対象相互間の関係性が「再編成」された状態を形容する言葉としてもちいることにしよう。そうすれば、在来化は、その再編成が生じる過程をさすことになる。多くの場合、在来化によって各対象は変成し、対象相互の関係性は変化することになる。

私たちが CHI/ 知に ZAIRAI/ 在来という形容をつけるのは、いまそこにある人びとの実践をとらえる独自の視点をもたないがゆえに、やすやすと伝統-近代の二元論にからめとられてしまわないようにするという消極的な理由からだけではない。在来という形容を、すぐれて関係論的な用語としてもちいることで、これまでの支配的な価値観や主義から自由になり、いまそこで実践されている知を相対的、文脈的に、そして正当にとらえて理解することができるとかんがえるからである。

ZAIRAICHI 研究は、現代アフリカをはじめ世界各地の今を生きる人びとによってたえまなく創りだされるさまざまな ZAIRAICHI の生成の現場にたちあい、その動態を地域研究の視点からフィールドワークによって解明することをめざす。さらに、人びとが ZAIRAICHI をより良き生活のために活かそうとする営み（＝ポジティブな実践）に注目して、その意味をグローバル（global+local）な文脈に位置づけて理解することを求める。

これまでふたつの分野で人びとの「知」があつかわれてきた。開発学・応用人類学の領域では、介入される側の知識をいかに開発の役に立て

るかが問題にされてきた。いっぽう、認識人類学の分野では、民俗知識（Folk knowledge）が文化の体系を反映していることを前提とし、研究対象を動植物や色彩の分類体系のように再検証可能な「知」に限定してきた。しかし、知に関してその実用的側面に意義を認めるか、認知的側面に普遍性をもとめるかというふたつの異なるアプローチは背反的なものではなく、むしろそれぞれの分野の学問的反省や展望のなかで相補的な視点としてのべられてきた経緯がある。方法論的にも共通点がある。

ZAIRAICHI の理解は、まず開発学と認識人類学が対立的に呈示してきた視点の折衷によって開始される。認識人類学がふれなかった「認識体系と社会的な相互交渉の関係」と、開発学があつかわなかった「有用性と認知の関係」の両方を射程に入れる。そのためには双方がともに看過してきた知の動態的側面を、その生成と実践に注目し、変化の過程を多様な文脈に即してフィールドワークすることがもとめられる。

ZAIRAICHI 研究の特色は知の生成と実践に着目することにある。まず出発点として、人びとの思考を一枚岩的にとらえずに多声性を認め、ZAIRAICHI を固定的な参照物とするかんがえや在来性を無限定な善とみる立場もこえる。そのうえで、社会的な文脈において ZAIRAICHI が生成する場や歴史的過程をつねに考察の枠内にいれながら、ZAIRAICHI そのものをめぐる言説や権力の政治性に注目しつつ、社会関係と交渉に関する ZAIRAICHI とそのポジティブな実践を評価する。

もうひとつの特色は、対象地域にくらす人びとの協力をおおぎ、ZAIRAICHI とその実践を視野にいれた協働的フィールドワークをおこなう点にある。私たちがフィールドワークの現場で知の生成を対象化する反省的視点をもつことで、人びとの ZAIRAICHI についての信念や実践を、西洋の知のパラダイムへの対抗や近代の支配的言説に対する抵抗として安易に解釈する危険をまぬがれることが可能になる。たんにローカルな文脈のみによる理解をこえてグローバルな文脈へ翻訳する作業も、協働を通じた実践的な思惟の知への関心なしには不可能であろう。

ZAIRAICHI 研究が質的にも量的にもじゅうぶんな「生成される ZAIRAICHI とそのポジティブな実践」の事例を集積することによって、方法論主導の開発学とは異なる、地域研究独自の成果として提示することができる。ZAIRAICHI がその生成と実践のプロセスをへて制度化され、公共の知となる機序が解明できれば、それぞれの地域にふさわしい発展の方策を生み出すことにも積極的な貢献ができるだろう。人びとの ZAIRAICHI の可能性は無限にある。



はじめに

金子 守恵 …… 01

アフリカ農村社会における高齢者の暮らし

— エチオピア西南部における高齢者の活動量と生活自立度の評価から —

野口 真理子 …… 05

ナミビア北東部、氾濫原に暮らす人びとのシロアリ塚利用

山科 千里 …… 15

ものづくりにおける男女の役割とその実態

— エチオピア北部・アムハラの織布製作を事例に —

板垣 順平 …… 25

ブルキナファソ農村地域における女性住民組織によるマイクロファイナンス運営

神代 ちひろ …… 35

エチオピア西南部農耕民アリの女性の生活実践における「もの」の利用

— 地域内の素材で製作された台所用具の利用を中心に —

南 佳枝 ……45



板垣 順平（いたがき じゅんぺい）

大阪芸術大学通信教育部文化人類学講座非常勤講師。1983年、兵庫県生まれ。大阪芸術大学大学院芸術学研究科修了、博士（芸術文化学）。2008年から東アフリカのエチオピア、特にアムハラ州の州都・バハルダールにおいて、織布の製作技術やつくり手の生業活動に関する調査研究をおこなってきた。現在は、シミエン国立公園内外の集落において、伝統的なものつくりの技術を利用した新しいみやげものの開発などをおこなっている。主な論文に「エチオピア・アムハラ織機と織技術ーその特徴と位置づけ」（民族藝術29号）がある。

神代 ちひろ（くましろ ちひろ）

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫制博士課程／日本学術振興会特別研究員。1984年、栃木県生まれ。同研究科、修士（地域研究）。2008年からブルキナファソの農村において、女性の生計活動や、女性住民組織が生活全般において果たす役割について研究をおこなってきた。近年ではマイクロファイナンスがもたらす社会的な影響にも関心がある。著作は「モロコシの山」（アジア・アフリカ地域研究）など。

野口 真理子（のぐち まりこ）

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫制博士課程。1984年、熊本県生まれ。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、修士（地域研究）。2008年からエチオピア西南部の農村において主に老いとケアをテーマに据え、人びとの生業活動をはじめとした日常生活のなかで、彼らがどのような社会関係を築き、お互いにかかわりあっているかということに関心をもち研究している。主な著作は、AGING AMONG THE AARI IN RURAL SOUTHWESTERN ETHIOPIA: LIVELIHOOD AND DAILY INTERACTIONS OF THE “GALTA” (African Study Monograph Supplementary Issue, No. 46), 『エチオピア西南部における高齢者の日常実践としてのケア』（修士論文）。

南 佳枝 (みなみ よしえ)

アジアとアフリカをつなぐ会 (AAJE) 会員. 1987 年, 大阪生まれ. 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, 修士 (地域研究). 2010 年からエチオピア西南部の農村において女性が利用する日用品とそれを介した社会的な関係に関心をもって研究をおこなう. 主な著作は, WOMEN' S HOUSEWARES AND THEIR USAGE AMONG THE AARI (重田 眞義と共著, African Study Monograph Supplementary Issue, No.46), 『アフリカ農村女性の生活用具とその利用』(修士論文).

山科 千里 (やましな ちさと)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科研究員. 1982 年, 北海道生まれ. 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科修了, 博士 (地域研究). 2006 年より南部アフリカのナミビアにおいて, 生態系におけるシロアリ塚の機能について, 動植物との関係に注目して調査・研究をおこなっている. また, シロアリ塚を含め, 人びとの自然資源利用についても調査している. おもな著作は「ナミビア北西部, モパネサバンナの植生に与えるシロアリ塚の影響」(アジア・アフリカ地域研究 10-2, 2011), “Interactions between Termite-mounds, Trees, and the Zemba People in the Mopane Savanna in Northwestern Namibia” (African Study Monographs Supplementary Issue, No.40, 2010).

金子 守恵 (かねこ もりえ)

京都大学大学院人間・環境学研究科助教。1974年、北海道生まれ。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程単位修得認定退学。博士（地域研究）。1998年からエチオピアにおいて土器づくりの実践や継承、変化、創造性などについて、技術人類学的な立場から調査研究をすすめてきた。アフリカの人びとによって創りだされてきた「もの」とそれをつくりだす人びとの知や技法を検討することを通じて、あたらしいコミュニティの生成や地域社会における発展の問題に取り組んでいる。主な著書に、African Study Monograph Supplementary Issue, No.46: Emerging Approaches to Understanding Gender-based Knowledge and Techniques in Africa (SHIGETA と共編)、『交渉する手指』（文化人類学 77-1, 2012年）、『土器づくりの民族誌』（昭和堂, 2011年）などがある。

重田 眞義 (しげた まさよし)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授。1956年、京都府生まれ。京都大学大学院農学研究科博士課程研究指導認定。博士（農学）。1976年からアフリカ農業における諸問題を、ヒト-植物関係論（農業科学、人類学、生態学、栽培植物起源学、民族植物学（エスノボタニー）、ドメスティケーション論など）の立場から考察してきた。アフリカの人々によって培われてきた文化的資源としての有用植物と、それに関する民俗知識の分析を通じて地域社会における発展の問題に取り組んでいる。主な著書に、African Study Monograph Supplementary Issue, No.46 Emerging Approaches to Understanding Gender-based Knowledge and Techniques in Africa (KANeko と共編)、『アフリカ農業の諸問題』（高村泰樹と共編著、京都大学学術出版会、1998年）などがある。



ZAIRAICHI 出版編集委員会

伊谷 樹一
金子 守恵
川瀬 慈
佐川 徹
佐藤 靖明
重田 眞義*
シモーネ・タルシタニ
曾我 徹
西 真如
西崎 伸子
マモ・ヘボ
山越 言
(* 編集主幹、50音順)

Editorial committee of ZAIRAICHI series

ITANI Juichi
KANEKO Morie
KAWASE Itsushi
Mamo Hebo
NISHI Makoto
NISHIZAKI Nobuko
SAGAWA Toru
SATO Yasuaki
SHIGETA Masayoshi*
SOGA Toru
TARSITANI Simone
YAMAKOSHI Gen
(*Editor-in-chief, Names in alphabetical order)

科学研究費補助金 基盤研究 A
「アフリカ在来知の生成とそのポジティブな実践に関する地域研究」

ZAIRAICHI 創刊号
アフリカにおける社会的な性差を基盤にした知識や技法を理解するためのあらたなアプローチ

2013年3月20日 初版発行
編者 金子 守恵、重田 真義
編集補佐 山本 雄大
装丁 池田 あいの
発行者 在来知研究会
発行所 京都大学アフリカ地域研究資料センター
〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46
E-mail : zairaichi@jambo.africa.kyoto-u.ac.jp

© Zairaichi Research Group

Printed in Japan

ISBN 978-4-905518-00-6

はじめに

金子 守恵

アフリカ農村社会における高齢者の暮らし

—エチオピア西南部における高齢者の活動量と生活自立度の
評価から—

野口 真理子

ナミビア北東部、氾濫原に暮らす人びとのシロアリ塚利用

山科 千里

ものづくりにおける男女の役割とその実態

—エチオピア北部・アムハラの織布製作を事例に—

板垣 順平

ブルキナファソ農村地域における女性住民組織によるマイクロ
ファイナンス運営

神代 ちひろ

エチオピア西南部農耕民アリの女性の生活実践における「もの」
の利用

—地域内の素材で製作された台所用具の利用を中心に—

南 佳枝